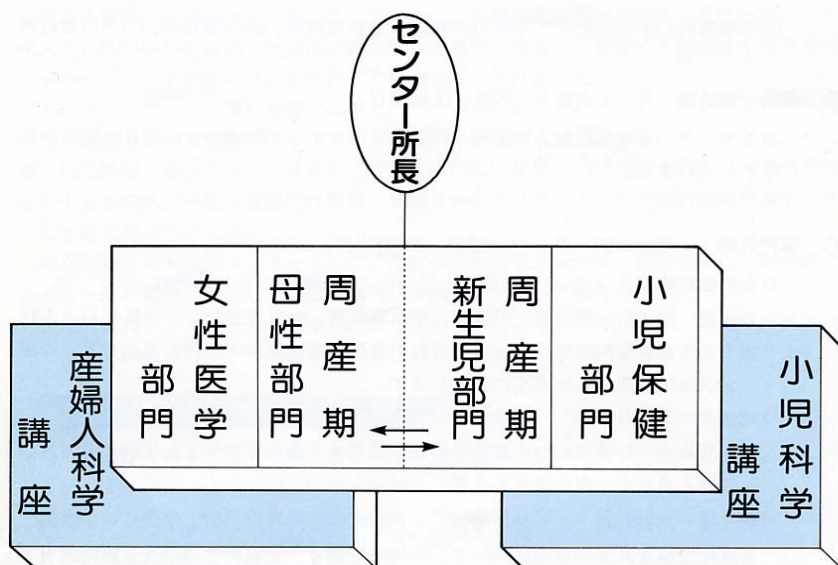


IV： 母子センターの個人史的軌跡

1. センターの変遷と改革

1) 1984年（昭和59年）センター開設

同年4月に坂元正一東大名誉教授が初代所長に就任し、同時に慶應大学から諸橋 侃が母性部門長及び教授、女子医大から山口規容子が小児保健部門長及び助教授、北里大学から仁志田博司が新生児部門長および助教授として、大学における本邦最初の母子総合医療センター設立に参画した。その後間もなく、産婦人科教授を兼任する武田佳彦が女性医学部門長、母性部門に中林正雄助教授、田辺晴男講師、岩下光利講師がスタッフとして加わった。



中央病棟3階を約2億5千万円を投じて改築し、従来の小児科管理の未熟児病児室（NICU4床を含む15床）をNICU9床を含む20床の新生児部門とし、従来の産婦人科管理であった分娩室（2）と妊産婦病棟（42床）を最新の母体胎児管理モニタリングシステムを有する母性部門として、新たな病院臨床単位として同年10月母子総合医療センターが開設された。



2) 1996年 小児科病棟ベビー室開設

小児科大澤真木子教授のご協力により、2号館4階小児科病棟内に約5千万円の設備投資を行ない、新生児回復室8床及び長期加療室3床（後に小児外科病棟に転用）が小児科との共同管理の新生児医療施設として開設された。その目的は、未熟児・病的新生児の長期に渡るベット占領が、高度医療を必要とする児の入院加療の妨げとなっているところから、軽症児の小児科病棟での管理を依頼することと、小児科で行われる母子センターを退院した児の管理をより円滑にするものであった。

3) 1998年 東京都指定総合周産期センターとして改装

厚生省の周産期医療整備システム（人口100万に1ヶ所の高次レベルの総合周産期センターを設備）の一環として、全国最初の総合周産期センターの一つとして東京都の指定を受け、約1億5千万円を投じ、母体胎児集中治療室（MFICU）9床の新設を含む分娩施設の改築および新生児外科病棟5床の増設を含む病児室の改築が行われた。

4) 1999年 小児・新生児外科診療科 (第2外科) 開設

一般外科亀岡信悟教授の御協力の下に1995年より非常勤で新生児外科症例の管理をサポートしてきた藤本隆夫助教授(現愛育病院外科部長)から2001年世川 修助教授に変わり、胎児診断された外科症例の救命率の向上に貢献している。

5) 2002年 乳児行動発達学講座開設に伴う共同研究

最新の脳科学の知識とテクノロジーを用いて胎児・新生児・乳幼児の神経学的発育発達をする研究講座(小西行郎教授)が開設され、それに連動して新生児病棟内に新生児生理検査室が設けられ、種々共同研究が企画実践されている。

6) 2005年 東京都の認可及び援助の下に、NICUを9から12床に、また病児室を24床に増改築する計画が進められている。

2. センターの人事の変遷

【1984年10月1日母子総合医療センター開所】

所長	坂元正一(教授)
女性医学部門	武田佳彦(教授) 岩下光利(講師)
母性部門	諸橋 侃(教授) 中林正雄(助教授) 田辺清男(講師)
新生児部門	仁志田博司(助教授) 山田多佳子(講師)
小児保健部門	山口規容子(助教授)

【1992年】

所長	武田佳彦(教授)
女性医学部門	岩下光利(助教授・部門長) 安達知子(講師)
母性部門	中林正雄(教授) 高木耕一郎(講師)
新生児部門	仁志田博司(教授・部門長) 星 順(講師)

高橋尚人 (助手)
小児保健部門 山口規容子 (教授・部門長)
三石知左子 (助手)

【2004年】

所長 仁志田博司 (教授)
女性医学部門 太田博明 (教授・部門長)
母性部門 松田義雄 (助教授・部門長)
牧野康男 (講師)
橋口和生 (講師)
新生児部門 楠田 聡 (助教授・部門長)
佐久間泉 (准講師)
小児保健部門 三科 潤 (助教授・部門長)
河野由美 (講師)

【2007年】

所長 仁志田博司 (教授)
女性医学部門 太田博明 (教授・部門長)
母性部門 松田義雄 (教授・部門長)
牧野康男 (准教授)
新生児部門 楠田 聡 (教授・部門長)
佐久間泉 (准講師)
小児保健部門 三科 潤 (准教授・部門長)
河野由美 (講師)

2. 私の母子センターにおける起承転結

1) 「起」: 夢に向かってのスタート

1983年当時の周産期ME懇話会は、いまなら「おたく」と呼ばれる同好の士の集いのような言いたいことを言い合う会であり、多分新生児サイドからの常連の参加者は私だけであったと思う。産科の方々が星の世界にいるような胎児からのメッセージに耳を澄ませて、赤ちゃんが何を言いたいのか読み取る努力をしていることに心を動かされた。目の前にいるかつて胎児であった新生児の声(情報)を分析して産科の人たちと議論しようと、北里大学の動物実験室で子犬を使った瞬時心拍数の variability を研究していたころであった。お名前は知っていたが、周産期のみならず産婦人科全体の大御所である坂元先生に、私

が初めて真近にお会いしてお話をしたのはその懇親会場であった。ニコニコと笑顔を絶やさず、もう私はその内容を知っているかのように、夢のような話を如何に実際の形にするかという魅惑的な言葉がぼんぼんと出てくる。新しい構想に基づく周産期センターと一緒に始めよう、という内容であることをようやく理解するまでに、しばらくの時間がかかったことを思い出す。「はい。」とか「そうですね。」という返事をしている間に、坂元先生は「一緒にがんばろう。」という意味の言葉と共に大きく柔らかい手で握手をすると、他の人群れの中に吸い込まれていった。共に故人となられたが、東京大学助教授であった桑原先生は、「前から話しておくのだったな。驚いたろう。」とその場でフォローしてくれ、すでに坂元先生と仕事をするようになっていた慶応義塾大学助教授(当時)の諸橋先生が、懇親会の後、ホテルのロビーで少し具体的な計画を話してくれた。すでに上層部での根回しのような動きがあったのであろうが、私には寝耳に水のような話であった。しかし、憮然という気持ちはなく、新しいドラマの始まりのような心の高まりを感じていた。それは、壮大な計画そのものもあるが、坂元先生の人の中に夢を奏でる不思議な個人的な魅力によるものであった。

その後、私どもがめったに行くことのない場所である四谷の料亭吉田屋で、当時の上司であった坂上正道北里大学教授と故吉岡守正東京女子医科大学学長が、小生の移籍に関してお話をする場に二度に渡って同席し、お二人の部下に対する人間的な思いをはせる心に触れる僥倖を得たのである。

坂元先生と御一緒に仕事をしてその警咳に触れ、先生のスケールの大きさと人間的な温かみを実感するにつれ、素晴らしいセンターとなることを確信した。スケールの大きさでは人後に落ちない当時の吉岡博人理事長も、坂元先生のセンター構想を聞いて、「これでは女子医大が三つも入ってしまう。」と言ったエピソードがある。センターの最終計画がまとまった時、坂元先生は「戦艦大和のつもりが駆逐艦ぐらいになってしまったけれど、最新鋭の駆逐艦だからね。仁志田君、一番良い物を作ろう。好きなように改築しなさいと。」と言われた。その言葉通り、まだ出来て6年ほどしか経っていない中央病棟の新生児センターとなる部屋の壁を叩いて歩き、変更可能な箇所を確認してコンセントの位置まで含め、理想に燃えた設計をした。しかし、どんな出来上がりになるのか一抹の不安がいつも心のどこかにあり、毎日布キャンバスで覆われた工事現場を覗きに行った。10月1日のオープンの数日前、その白い覆いが取られ、手品のようにピッカピカの新しいセンターがお目見えした時の感激とホッとした安堵感を昨日の様に鮮明に思い出す。

産科部門も産科ME 三天才(奇人)の一人と呼ばれていた諸橋教授が、コンピュータを駆使した最先端の母体胎児モニタリングシステムを構築し、NICUも9

病床のベッドサイドモニターから床下を這って光ファイバー用の線が張り巡らされていたのである。センター内には母体胎児モニター室と新生児モニター室が別々に設けられ、それらがMEの機械で身動きできないほどになると、諸橋教授はうれしそうに、ようやく私の部屋らしくなった、と笑ったことを思い出す。名司令官と名参謀の下、その恩恵を受けた新生児部門も含め、確かに世界最先端のイービス艦なみの周産期センターが誕生したのである。

7月に母子センター常勤になってからは、センター開設までの3ヶ月間、坂元先生の狭い教授室に私と諸橋先生が同居し、仕事以外のたくさんの人生訓話を聞く機会を得たことも幸運であった。既に小児科から山口規容子先生がフォローアップを担当する小児保健部門長として内定しており、先生が我々の部屋に来ると、そのさっぱりとした人柄と大きな笑い声で部屋中が明るくなるようであった。まもなく中林先生が母性部門に着任し母子センターの骨格となる役者がそろったことになる。また米国帰りの岩下先生、病身の諸橋教授をサポートする田辺先生が加わり体制が整ったが、さらに強力な人が加わったのである。ある時、坂元先生がいたずらっぽい顔をして「仁志田君、アッと驚くような人が女子医大に来るよ。」と言われた。「誰ですか。」と聞くと、笑いながら「すぐわかるよ。」と言ったのが、産婦人科の武田佳彦教授であった。日本の周産期学の創始者の一人であり、国立大学のバリバリの現職の教授が、名門東京女子医大といえども私学に来るとは誰も考えなかったと思う。それほど、坂元先生の個人的な魅力と新しい構想の母子センターは、人を引き付けるものがあつたと、今更ながら思っている。こうして、坂元艦長の指揮の下、最強の乗組員を乗せて最新鋭の駆逐艦「母子センター号」は船出したのである。

2) 承：世界への飛翔

開設当初は、以前から働いていた山田・新井両先生に北里から赴任した能勢先生の3人が交互に当直をするので、私も当直に入れてもらったところ、3人とも心配で病院に泊まるので、結局みんなに逆に負担をかける結果となってしまった。その後、全国から当センターで働きたいという若い医師が応募してくれ、海外留学や関連病院となった聖母病院と愛育病院に出向している医師を含めると、17-8人のスタッフすべてが異なった大学出身ということもあつた。そのほとんどが、1-2年の当センターでの研修を終えると自らの大学に戻って行き、その地で女子医大で学んだ新生児医療を展開してくれた。このようにして、当センターは新生児・周産期医療のメッカとなつていったのである。

母子センターの歴史は超未熟児医療の歴史と言っても過言ではない。その理由は所長挨拶の中で述べたごとく、産科とフォローアップチームまで含めた総合力の結果が反映されるからである。それを象徴するようなエピソードが、セ

センターオープンはその朝に、双子の超未熟児が誕生したことであった。工事の間、重症児は他院へお願いし、産科病棟内の仮設の分娩室と病児室で診ていた数人の軽症児のみが入院患者であり、オープン第一日目の回診では、みんなに何を話そうか、などと考えながらセンターに行くと、ドタバタ大騒ぎをしているのである。当時のほとんどのスタッフにとって、超未熟児の双子の誕生はあまり経験のない大変な出来事のようにであった。出生に立ち会った私が、「超未熟児であっても元気に自分で呼吸をしているのだから、しばらく保温と輸液で様子を見てごらん。」と suggestion すると、みんな不安げに顔を見合わせていたが、結局その双子の超未熟児は挿管をせず元気に退院したのである。その2人が20歳の誕生日を迎え、母子センター20周年パーティーに参加してくれたのである。

産科・新生児・フォローアップその他のセンター各部のチームワークの結果であるが、当センターの超未熟児の診療成績は当時の水準の群を抜くものとなり、世間の耳目を集め、諸外国から多くの専門家の訪問を受けるようになった。その中の一つに、イタリアのピエトロ・ゲリーニ新生児学教授のエピソードがある。「数日間見学に行きたい。」という連絡があった時、学会か何かで日本に来るついでに寄るのかなと思っていた。ところが彼は、前任地のヴェローナ大学からフェラーラ大学の新生児主任に転任する際に、世界で一番優れている新生児医療を見てみたいと、イタリアから東京女子医科大学の母子総合医療センターを、たった3日間訪ねるだけの目的で、遠路はるばる来てくれたのである。私達にとっても感激であった。

個人的にも世界各地の講演に招聘されという恩恵を受けているが、日本の新生児・周産期医療の名声を高めることに寄与したと自負している。故小川次郎名古屋市大小児科教授に、「仁志田君、日本の新生児医療は外国で全く評価されていない。あなたは外国に顔が広いから是非正しく伝えてくれ。」と言われていた。1998年のHot Topics in Neonatologyという世界最大の新生児カンファレンスで当センターの超未熟児の成績を発表し、演壇を降りようとしたところ、座長をしてくれた新生児の大御所 Avery 教授が押し留めて握手を求めると、聴衆からの拍手が鳴り止まなかった。Standing ovation であった。会場でも質問攻めにあう私に、名古屋市立大学の戸荻 創教授が、「先生ありがとう」、と言いに来てくれた。恩師の小川先生の思いを代弁する気持ちであったと受け取り、少しながら感傷的になったことを思い出す。

3) 転：さまざまな思い出

母子総合医療センターがオープンして2-3年経ったころ、坂元所長が「仁志田君、凄いな、新生児部門だけでも黒字になるのだね。」と部門別の年間収支表

を持って驚いたように話された。母子センター設立の稟議書作成の時、どうしても新生児が黒字になるとは考えられえず、ハイリスク妊娠分娩を安心して管理できることや、新生児部門で管理された児が小児科の患者になる、などの付加価値を強調して書き上げた経緯を知っていたから、良くてトントンとと思っていたのは当然であった。2億数千万の設備投資の返済が加わるのでマイナス収支となるだろうが、母性部門の収入でカバーするから心配しないで好きなようにやりなさい、というのが坂元所長の言葉であった。確かにいつもNICUは満床で、みんな本当に良く働いていたが、新生児部門長(当時)の私も、センター開設数年で設備投資を完済できるとは予想していなかった。その影には、第一線で働く新生児の仲間が、力を合わせて強制収容所のような新生児の医療現場を改善しよう、と作り上げた新生児医療連絡会の、行政や一般社会への働きかけの地道な努力があった。その新生児医療連絡会は、亡き畏友内藤達郎(当時国立小児病院新生児部長)の叫びのような遺言を受けて、当母子センターで産声を上げたのである。私がほとんどの原稿を切り、スタッフ全員でそれをコピーして封筒に詰め、発送し続けた。5年程経って、ようやく社会的認知を得た連絡会事務局が他に移動する時、当時のスタッフの加部先生(現愛育病院新生児部長)が、「ホッとしたけれど、一抹の寂しさもありますね。」と語った台詞が今でも耳に残っている。小生の後任の新生児部門の責任者として、関西の新生児仲間から大ブーイングを受けながらも引き抜くようにして着任してもらった楠田助教授が、その新生児医療連絡会の6代目の事務局長であることも、なにかの因縁と感じている。

世界的な雑誌Lancetに、新しい新生児の病名(新生児トキシックショック様発疹性疾患、NTED)が掲載されたことも忘れ難い思い出である。1995年代のある日、生後2日目の児が39度という高熱で入院した。敗血症の精査は陰性で、入院2-3日で発疹とともに解熱し以後元気で退院した。新生児の突発性発疹様であったがウイルス検索はマイナスで、なんだろうと議論している間に、同様な患児が数例続いた。高橋講師(現自治医大小児科助教授)が、私に「先生、今までこんな症例見たことがありますか。」と尋ねたので、「これだけ特徴ある臨床所見を示すのだから経験したら覚えているはずだ。初めて見る症例である。」と答えると、彼は新しい疾患であると確信して、微生物の内山教授の指導を受け、病因病態をMRSAの外毒素がスーパーアンチゲンとして新生児特有の免疫系に働くためと解明したのである。やがて全国各地から症例が報告され、近年はヨーロッパの国からも同じ病名で報告が見られるようになった。やがて世界の教科書に載る疾患を発見し、その病因病態までも解明したことは、当センターの臨床力とそれを支える本学の学問的深さが相まった結果と受け取っている。

平成天皇・皇后両陛下の初孫となる、秋篠宮紀子妃殿下の2度の御出産(眞

子内親王と佳子内親王)に、宮内庁御用係りである坂元センター長を補佐する役目で、中林教授と米山看護師長と共に何日もの間、宮内庁病院に通い、岡井先生(現昭和大学産婦人科教授)も加わり、小さな部屋で胎児心拍モニターとにらめっこをしたことや、正常児ながら毎日皇居に診察に行ったことなど、忘れられない思い出となった。

坂元所長を会長とした第一回国際周産期学会や中林教授を会長とした国際妊娠中毒症学会を始め、多くの学会を当センターが主催した。いずれも世界一流の学者がセンターを訪れることとなったが、その成績のみならず、産科と小児科の一体化した連携のシステムに最も興味を示し、賞賛の言葉を発していた。日本のみならず産科と小児科がまだ上手く連携が取れていない時代であった。特に第一回国際周産期学会は、国際学会がその第一回を本邦で開いた初めてのものと言われ、天皇皇后両陛下の御臨席を賜った。それ以上に、日本の周産期医療が世界に認知された証であり、その実現の最大の立役者の坂元名誉所長の心意気と誇りが、現在もセンター入り口の壁に貼られた「世界の周産期ここに始まる」のペナントに刻まれている。(臨床成績のスライド3をご参照下さい。)

4) 結：若い人々に新しき夢を託して

人が老いるごとく組織も老いる。体を鍛えるように、当センターもこの20年の間に、曲りなりにも何度かの増改築を行い時の変化に応じてきた。しかし、総合周産期センターゆえに、超未熟児や胎内で診断される重症の新生児症例が送られてくるようになり、物理的な制限が大きな足かせとなってきた。最新鋭とはいえ、駆逐艦は駆逐艦なのである。改めて戦艦大和を目指した先達の慧眼に敬服する。次の世代の大きな課題の一つは、この施設規模の解決である。

もっと大きな老化の問題は、アルツハイマー同様の心と意識の衰えである。開設当時の燃えるような母と子への医療への情熱、日本の周産期医療のパイオニアたらしめる意力が、時の流れと共に萎えてきたのである。先達が打ち立てた、「従来の縦割りの講座や教室にとらわれない、真の母と子の為の医療を行う」という母子センター創立の理念が忘れられ、元の古い体制の泥沼の飲み込まれていく恐れが迫っている。輝かしい歴史を刻んできた当センターも、開設当時を知る者は私のみになってしまった。その私が、やがて去る時までになすべきことは、その意思を受け継ぎ、さらなる発展に連ねることの出来る人材を育て当センターの将来を託することである。幸いにも、松田義雄助教授と楠田聡助教授という余人を持って変えがたい程の人を得て、すでに各々母性部門長および新生児部門長として実質的なセンター運営を託している。松田義雄助教授は日本最大の周産期センターの一つである鹿児島市立病院で永年周産期医療の中心として活躍し、現在の日本のこの分野のオピニオンリーダーとして全国

に名が轟いている。楠田 聡助教授は日本最大の実地新生児科医師の集団である新生児医療連絡会の名幹事として知られており、その臨床能力のみならず新生児医療を超えた周産期医療全体への幅広い視野に立った見識を持っている。この2人が、母子センターの核である周産期医療を協力して担ってくれば、これまで20年の母子センターの歴史を継続するのみならず、時代にマッチした姿に発展させてくれることを確信している。その意味で、2人がその力を発揮できる場を作るのが、私の最後の仕事として最も大切と考えている。思想を受け継いだコアが出来れば、自らその周りにはそれなりの人と力が集積してくる。かつて当母子センターがそうであったように。